

療養環境研究会 第4回 ワークショップ議事録

■日時 平成 16 年 3 月 27 日（土） 13：00～16：30
場所 TOTO テクニカルセンター（世田谷区桜新町 2-24-2）
テーマ トイレでの転倒

■次第

- ・開会の挨拶 笈淳夫（国立保健医療科学院）
- ・研究報告
 - 1. トイレ内の転倒事故の傾向 橋本美芽（東京都立保健科学大学）
 - 2. 高齢者介護施設における排泄環境づくり 佐伯博章（地域総合設計）
 - 3. 水まわりの使い方と安全 吉良悟（東陶機器株式会社）
- ・グループディスカッション
A 班、B 班にわかれ、一般トイレ、車椅子対応トイレそれぞれの環境下で、病院での排泄動作とそれに伴う看護動作について報告し、求められる環境について討論
- ・まとめ 笈淳夫（国立保健医療科学院）

■研究報告

1. トイレ内の転倒事故の傾向
 - ・ H15 厚生科学研究をもとにトイレ内での転倒事例 15 件について報告
 - ・ 急性期病院ではあるものの高齢者が多い。
 - ・ 転倒事例は排泄動作の後半（お尻を拭く～立ち上がる～着衣～移動）に集中
 - ・ 何らかの付き添いが必要や方が 13/15 であるにもかかわらず
 - 6 件は看護師が排泄状態にあることを把握していなかった
 - 7 件は看護師が指示を与えて離れ、指示を守れなかった
(認知理解に問題あり、このような患者にナースコールでの連絡を委ねることは適切なのか?)
 - ・ トイレ環境に求められること
 - 座位姿勢が安定すること
 - 立ち上がり動作でバランスをとりやすい ほか
 - ・ 問題点と課題
 - 認知・理解力低下への対策不足（ナースコールだけでよいのか）
 - 急性期病院にも高齢者対策が必要

2. 高齢者介護施設における排泄環境づくり

- ・生活リハビリを実践している介護施設の事例紹介を通して排泄環境を考える
- ・特養「菜の華」、デイサービス「うたたね」、養護「和楽園」
- ・求められる環境
 - 手摺り、テーブル、壁など身体を支える環境づくり。例えば、立ち上がりをサポートできるしつらえ（テーブルなど）
 - 便器と車椅子の高さをそろえること。足が床についたうえで。
 - 長年の習慣を大事にする（例えば、落とし紙、小便器など）
 - モックアップを作成のうえシュミレーションを行う
 - 可変性を保障する（竣工後の新たなニーズへの対応）

3. 水まわりの使い方と安全

- ・当事者（高齢者、障害者）にトイレの使い方を再現してもらったビデオを視聴しながら、トイレ空間のあり方を検討する
- ・身体状況別（杖、車椅子、車椅子+一部介助、車椅子+全介助、麻痺側別に）
 - 一般トイレ（自立歩行、手すり・杖方向 1400×800）
 - 車いす対応トイレ（車いす 1400×1100）
- ・便器の高さ 450 と 400 足が床につく高さ
- ・トイレと手摺りとの距離 センター設置の不具合など

■ワークショップ

- ・A班（ファシリテーター 小林・保健医療科学院 報告 杉山・武蔵野赤十字病院）
 - ・一般トイレと車椅子トイレの使いわけを確認
 - ・便座の離座センサーが有効ではないか
 - ・病院側からメーカーへの情報提供の必要性あり（例えば、車椅子と便座の位置は 90° として TOTO ではシュミレーションするが、現場の実態は 30° ）
 - ・急性期と介護施設の違いがあるのではないか
 - ・多機能化することのリスクもあるのではないか
- ・B班（ファシリテーター 工藤・戸田建設 報告 長濱・厚生労働省）
 - ・排泄後～移動までの行為に問題が多いことを確認
 - ・トイレの紙の問題、わからない行為が存在している
 - ・点滴スタンドの性能（移動用具、時には立ち上がり支援用具としてさえ使用）
 - ・洗面（トイレ内の小さな衛生機器、衛生的に有効なのか？）
 - ・離座センサー

■まとめ

- ・急性期病院の高齢化が転倒のベースとしてある。ただし、急性期病院と介護施設とでは対策が若干異なるようである。前者は一般解を、後者は個別解を
- ・見てない時に転倒が起きている。これをどう把握するか。ナースコールに頼らずに。なお、一人での排泄環境については未だ不明な部分が多く、実態把握が必要では
- ・事故に至るケースの裏には、うまくいっているケースが多数ある。その中で、どう対策を講じるか。

■次回予定

- ・第5回ワークショップ 5月22日（土） 13：00～16：30
場所、テーマ未定、担当：横井郁子（東京都立保健科学大学）

文責：井上由起子（国立保健医療科学院）